

だんだんひどくなる教育現場

日本の若者に未来はないのか

教育現場は荒廃しているのか

最近やたらに目に付くのが教育関連の新聞記事。しかも、はなはだ物騒なものが多い。

いわく、児童との関係を悩み「担任やめたい」が小学校で35%。我慢知らぬ園児「幼稚園にも学級崩壊の芽」、「キレる子」家庭に原因多い。非行に甘い親増加、「防ぐ自信ある」も低減。少年非行「第4のピーク」進む凶悪・低年齢化。学級崩壊から、問われる公共性の作り方。大学はどこへ、入学しても「登校できぬ」幼稚な「高校4年生」迷惑行為「なぜ悪い」。少年の自殺「最悪の74人」。などなど……。

これだけを見ていると、教育の荒廃、ここに極まれり、の感がある。しかし、毎朝ランドセルを背負った小学生が走り去る姿を見ると、あの子供達が何処で「怪獣」に変身するのかわからない。

東京大学の某助教授が「怖い話をしましょうか」と前置きして話したのは、小学校の教師へのアンケートで「分数の掛け算・割り算を教えることのできる、と答えた先生はたったの3割なんです。子供が算数をできなくなるのも仕方ないですね」というもの。続いて教師の学力問題は教育界ではタブーなんです - というのだ。これは本当に怖い話で、子供の教育以前の問題。本来大学のやる事ではない道

徳やマナーの講話を設け、「大学1年生だと思っただけ。高校4年生なんです。今までの大学は口では立派な事を言いながら、そういう教育をしてこなかった」と語っている。こうなると、教わる方に問題があるのか、教える方に問題があるのかが分からなくなる。子供に罪が無いとすれば、責任は大人の方ということになるのだが。

悩みの多い担任の先生

さて、新聞記事の詳細について検討してみたい。順序として先に記載した順に見てみたいと思う。

まずは、「日教組アンケート」に示された、小学校での担任を辞めたい35%について、である。

これは昨年12月全国の加盟教組を通じた調査で、「担任を辞めたいと思った事がある」34.8%。理由は、学級経営や指導上の悩みなど、子供との関係を挙げたのが56.6%。「愛情不足によりすぐキレる子が40人中3人、うち1人が暴力行為を繰り返す。子供たちが大きく変化し、これまでのやり方が通用しなくなった」

次いで「保護者の理解を得られなかった」など、保護者との関係の悩みは16.2%。

「仕事が多くて土日も無い」も15.0%あった。保護者との関係が厳しいというのは子供の教

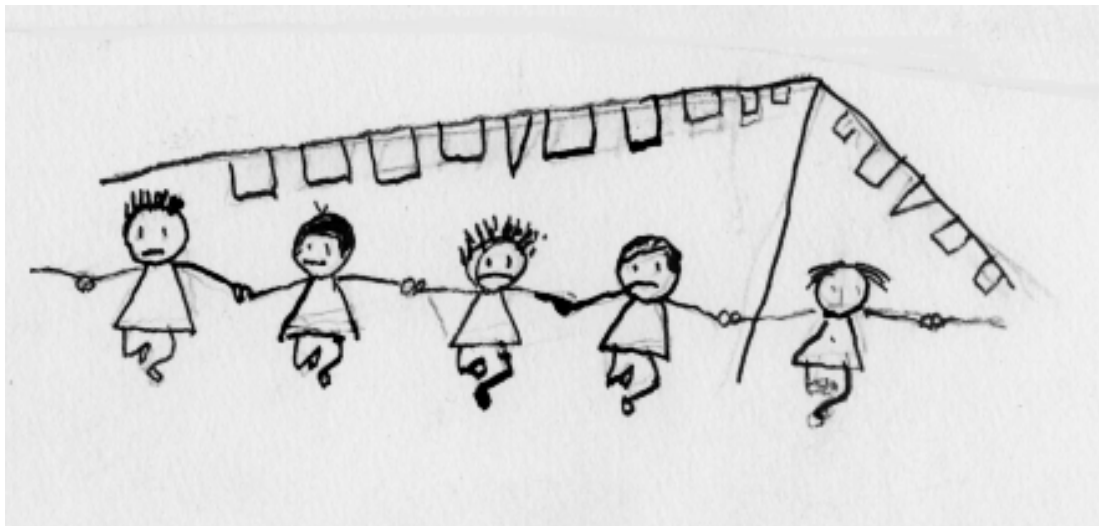
育とは関係ない。子供がキレルとか、子供達が大きく変化し、これまでのやり方が通用しない、というのだが。この変化の時代に、子供だって敏感に反応するだろうし、これは取りも直さず今の教育系大学で教えている教育論が役に立っていないということに過ぎない。文部省はやたらマニュアル作りに血道を上げ、自分達に都合の良い子供像を作りたがる。子供だって生きているのだからそう都合よく画一的な人間なんかになるはずもない。それぞれが個性的で妥協しないところに面白味があるはずだ。枠にはまった人間になれと文部省が強制するなら、子供達だけでなく親達だって反対するはずだ。本来、教師ほど柔軟な頭脳を要求される職場はない。子供をマニュアル・バカにしないで、個性を伸ばす。それが真の教育ではないか。

しかし、保護者との関係で悩むというのは分かる。私の娘が小学生の頃、PTAに出席すると、ある母親が立ち上がって「我が家では日曜日といえば主人と私と息子と三人でゴルフの練習に行きます。だから日曜の宿題は出さないで下さい。親が宿題をやったのでは意味がありません」。この言葉を聞いた途端、私の方が恥ずかしくなって真っ赤になった。それでも弱々しく立ち上がり「宿題というのはご両親と一緒にやるものじゃありませんか。子

供たちが学校でどんな勉強を教わっているかを知る、最も適したチャンスですよ」と言ってしまった。そのご婦人は、私を睨み口をきこうとはしなかった。だから、その意味で先生のご苦労は判る。

昔も今も変わらない園児たち

「幼稚園にも学級崩壊の芽」という記事があった。「今の園児というのは大人たちの理解を超えた子供たちが増えている」と園長先生がおっしゃる。加えて「我慢できない」「人間関係がうまく結べない」「瞬時にキレる」「すぐあきらめる」という追打ち。この現象は親が躰を見失っているからだ、とある。多少あるにしても、私も児童劇団(人形劇)の経験をもつが、幼児用の出し物は15分以内都決めていた。それを超えると園児は駆け出し騒ぎ始めるからだ。この現象は昔も今もかわらない。園児の運動会も手伝ったことがある。徒競走で年少組の園児は全員が手をつないで駆け出した。中には母親を見つけて走り去る子もいた。それが年長組ともなると、ちゃんと競争になる。そろそろ肉体的に自分が優位であることを示そうと、懸命に走るようになる。自我の芽生えだ。園児は先生に褒められると、急に目を



輝かし誇らしげな態度を取る。自分が先生達に認められたことに誇らしげになる。昔と今とどこが大変りしたのだろうか？キレるというのが相手は幼児、手に余ることもあるまい。しかし、親達の影響が全くないとはいわない。子供は先ず親達の背を見て育つのである。とりたてて親が「あきらめずに躰をすることですよ」と言うのも虚しいが、自信を持って子供に接すれば、子供は自然に学ぶものだ。幼稚園は母親を離れた子供達が初めて集団生活を学ぶ場所なのだから、母親の姿が見えなくなると急に不安になったり、置き去りにされる心細さに泣き出す子供がいても可笑しくはない。しかし、幼児も急速に周辺の環境に慣れ、個性的行動を発揮するようになる。

子供、特に幼児というのは、周囲の大人達や世の中の在り方に敏感に、しかも貪欲に取り込まれて反応する。そこには時代や大人達が造ってきたルールも道徳も鵜呑みにして、誠に無邪気に取り入れたり真似したりする。勿論、善悪の判断には関係がない。子供達が変わったという園長や先生達の方に問題がありそうだ。自分達が作り上げてきたルールや世の中の変化に左右され、虚飾や世の中の自分を見る目の方が気になって、本音の部分で園児達と接しなくなった。そして、園児に無視された先生達が浮き上がってしまっている。全

く夢も希望もない状態だ。一にも二にも園児達に接する態度は、愛情を持って接する事だ。それ以外に何があると言うのだろうか。躰をしなかった母親を怨んでみても、せんない事なのに。

殺人は勘定に合わない

少年非行「第四のピーク」進む凶悪・低年齢化は、総務庁が発表した98年度版の「青少年白書」にある。97年度の刑法罰少年(14～19歳)の数は、前年に比べ19244人増え、152825人(14.4%増)。同年の年齢層の人口千人当りの逮捕・補導者数は、戦後の第三ピークだった88年以来9年ぶりに16人台を突破。「第四のピーク」になったといい、非行の凶悪化、低年齢化も進んでいるという。現代の非行問題の特徴として 凶悪凶暴化 過去に非行歴の無い少年による重大な非行 「遊ぶ金欲しさ」を動機とする非行などがあげている。この数字を見る限り本当かなと思うのだ。「欲望や衝動をコントロールできずに短絡的に行動する」「被害者や周囲の受ける悲しみへの認識が欠けている」との指摘もある。他人の悲しみを配慮する心があれば、凶悪にはなるまい。

同総務庁の「非行原因に関する総合的研究調査」では、我が子が非行に走るのを防ぐ自信

があるという保護者も減少し、若い親ほど自信が無い傾向にあるという。表によると34歳以下では、自信がないが20%を超え、55歳以上ではゼロ。この数字を見る限り、若い親達の戸惑いが見え、反対に年を経た親達は長く見たり経験してきた世の中の仕組みや対応に自信があるのだろう。この場合の躰や教育は命懸けでやらねばならぬ。自信というには年齢は関係がない。その責任をどう取るのかと言う差でしかない。

ところで、先日テレビで秋田の能代工業高校がバスケットで三冠を三年連続で達成し、その練習風景を放映していた。指導の先生は「私は勝つために教えているので、多少人間関係が悪くても仕方が無い」と言い切っていた。全国の中学校からバスケットのエリートである精鋭が集まって来るが、その練習は厳しく、他人の面前で叱責、罵倒する。ミスは決して許さない。これでは人間関係にも影響するなど納得するものだった。練習についても「特別な事はやらない。泥臭く基本に忠実に反復するだけだ」部員はその扱きに耐え、技術を習得しようと懸命だ。しかし、三冠三年連続を果たした高校生の目は輝き、清々しい笑顔が並んでいた。耐える事を知らないと言われる中・高校生が、一つの共通する目的を成就しようとする時、彼等はどのような練習にも耐

えている。あやうい人間関係をも超越して。同一の目的を持ち、仲間と団結する姿には、ひ弱な現代の中・高校生の姿はない。

夢も希望もない日本の中・高校生？

先日、「夢も希望も無い、中・高校生」という記事があった。これは、アメリカ、中国、韓国の中・高校生と同世代の日本の中・高校生と比べたもので、財団法人日本青少年研究所などが発表した国際比較調査によるものだ。

21世紀が「希望のある社会になる」と思う生徒は、中国で約九割に上り、アメリカ、韓国でも六割を超えたのに対し、日本は中学生44%、高校生35.3%といずれも五割を切った。「生活は今より豊かになる」では、中国、アメリカでは約八割、韓国でも六割以上だった。日本では、中学生34.2%、高校生29%と悲観的見方が強かった。

また、アメリカの中・高校生は、「勉強がよくできる」「高い社会的地位に立つ」など多くの項目を「人生目標」として肯定しているが、日本の中・高校生は目標が少ない。日本の多くの生徒が目標としたのは「自分の趣味をエンジョイする」「その日その日を楽しく暮らす」など個人生活に関する項目ばかりだった。

これまでの日本の大人達は、そのほとんど

が会社人間だった。勤める企業のために、個人生活を犠牲にして生きてきた。しかし、その結果はというと、バブル崩壊によって、長年忠勤を励んだ企業から、リストラの名の下に放り出され、人生設計を狂わした人々が大量に巷にあふれた。生徒達はこのような世相の現実を眺め、反動として個人生活中心の目標をかざして見せている。別に目標を持たない訳はないが、馬鹿げた調査にうんざりして、希望の無い将来をポーズとして示しているのだ。その薄臭いが見えるようだ。野球、サッカー、相撲取り、タレント、学者など、目標は持っているし、頑張ってもいる。しかし、大人達が壊してしまった世の中の秩序や仕組みに対し、「あなたとは別の生き方をするのです」と精一杯の抵抗を示している。皆そんなに馬鹿じゃない。

とにかく生徒が未来に夢を抱き、目的、目標をしっかりと持つことがなければ、未来は有り得ない。

もう一つのテーマである少年非行と凶悪化だが、最近も4人で1人の高校生を殴り殺したとか、71歳の老婆を高校3年生の生徒が殺している。喧嘩の末に相手を殺すというのは、最近の若者が喧嘩馴れしていないからで、手加減を知らないからだ。若者の特権、喧嘩は大いにすべきだ。その方が内にこもらず凶悪事件にもつながらない。老婆殺しは今の所、説明のしようがない。だが、近頃、新宿の街などで聞く東南アジア系の人達の行動が変わったという。どういう事かという、殺人請負人の多かった時期には、安い料金を殺人を請け負った

が、最近では彼等も受け取る料金と殺人というリスクの多い仕事が、割に合わない、つまり、勘定が合わない事を知り始めたというのだ。殺人による刑は重い。だから、出来るだけ避けて通ろうという訳だ。彼等は自分達の収益を守るためには、殺人も行う。が、請負ともなると話しは別だ。

高校3年生にもなれば、算数の計算ぐらいできるだろう。頭の病気でもない限り、損得勘定ぐらいしなくては、生存する意味がない。小学校の低学年ではないのだから。それにしても世界では民族、宗教による人殺しがやまない。アメリカでは機関銃を乱射した高校生もいた。世界人口が増え続ける今は、人減らし行為の部分もあるのかもしれないが、人命の値段は高いのだし、簡単な謝罪ではすまされない。

才能を潰さず異端を育てる

最後に登場して頂くのが大学問題。それにしても大学教授の嘆き節の多いのに驚く。「大学はどこへ」というキャンペーンがある。とにかく最高学府で生活指導が必要だそうで、男子学生の長髪、女子生徒のマニキュア禁止で、制服着用。違反が目には余ると「イエローカード」が出される。学長による道徳やマナーの講話は必修だ。この姿をレジャーランド化してきた既存の大学に対する強烈な批判とされている。

入学しても「登校できぬ」学生も増えているそうで、相談相手もなく、知人と会いそうで大

学のカウンセリング室にも行けず悶々とする孤独な4年間だという。相談があっても「精神疾患のような深刻なケースもあり、友人ができない、人と話すと緊張する、といった相談が増えた」というのだ。

大学は学問の場だからそんな学生は放っておけという教授もいるが、それでは通用しにくくなっていると指摘する教授もいる。それにしても、今の大学生は幼児化が進み未熟児に成り果てたのか。このことについては学力の低下にも繋がっているようだ。

学生の学力低下は、海外論文をテキストとして使ってきた大学が日本語の学習に変えたというが、その理由は英語の語彙が少なく、読解力も落ちたので、ゼミが英語解釈で終わってしまうからで、そのため経済理論の研究までたどり着けないのだ。それだけではない、「算数」ができない学生が話題になるそうで、旧帝大でも1年生を対象に数学の学力調査をやると、計算の解けない学生が二割いたという。その上、修士論文でも何をいいたいのか分からない文章が増え、基礎学力のお寒い現状が浮かび上がるという。これは「受験科目しか勉強しないため、小・中学生レベルの知識さえおぼつかない」と危惧する。そのため「補習授業」を実施する大学は、東大・京大以下67校、私立で164校にのぼる。科目の中には「日本語表現法」というのさえある。

この現象を「教育システム全体を見直さなければ将来、日本社会の衰退は免れない。学力低下は社会問題」と警鐘を鳴らす教授もいる。教育内容が三割減は小・中学校の新学習指導要領が2002年度にスタートするが、基礎学力の欠けた大学生が更に増える可能性は高い。つまり、学力低下は、研究面を重視してきた大学に教育機能の問い直しを迫っている。

こう見てくると、戦後50年の間に模索の連続で、改革という名の下に、制度をいじり、平等の名の下に多くの改革を行ったが、来るべき21世紀に役立つ学生を育てることができるとお寒い状況だ。ノーベル物理学賞の前筑波大学学長の江崎玲奈氏は、「個性を最大限に発揮でき、それに応じた報酬が得られる社会。それを実現する条件として、自己発見を促す多様な教育」をあげ、異端を育て才能を潰さない。それが21世紀の人材作りにつながる - としている。

先日、中・高校生からのアンケートに、将来なりたい職業のナンバー1に大工が選ばれた。先行きの見えない社会、伸びるかどうかわからぬ未来の不透明感に、腕に職を付け、父から子、子から孫へと伝承する技術を選ぶ子供達は、確実に形の見える物作りをやりたいという。誰かが言っていたが「江戸時代に返れ」に通じる。

